

# 第20回大会報告記

中 窪 靖

10月27日（土）京都文教大学において、第20回日本アイリス・マードック学会が開催された。まずは、12：30より総会が行われ、ハラール会長の挨拶の後、岡野副会長より午前中に行われた理事会報告があった。次回の開催はマードックの生誕100年に当たるので、何か特別な企画ができないかとの意見のあったこと、その意味もありマードック研究の大御所を講演のゲストとして招聘すべく働きかけを行う旨の報告がなされた。次回、大会は明治学院大学を会場にして、10月に行う予定である。

当日は、4つの研究発表と1つの特別講演が行われた。

1つ目の研究発表、フィオナ・トムキンソン氏の「Between symbolism and realism: death, rebirth and intertextuality in *The Book and the Brotherhood*」では、氏は作品 *The Book and the Brotherhood* を中心に、その中に現れる19世紀と20世紀の作家、ディケンズ、ウルフ、そしてロレンスの影響を指摘した。

2つ目の研究発表、岡野浩史氏の「‘Something Special’ 再読」では、氏はマードックの異色作

品 *Something Special* の中に、ジェイムズ・ジョイスの唱える“エピファニー (epiphany)”を見出そうとする研究であった。発表者は、イヴォンヌの決断を、彼女の中で「単純平凡な事件や経験を通して直感的に真実の全貌を掴む」といういわゆる啓示を得たからではないかと結論付けた。合わせて、発表者からはこの作品の翻訳に多くの不備が見られるとの指摘があった。

3つ目の研究発表、ウェンディ 中西氏の「Iris Murdoch’s Letters in the English Epistolary Tradition」では、氏はイギリス小説の勃興期に起こった「書簡体小説」の伝統の中で、膨大な手紙を通じて作家マードックの日常と創作活動のはざまを覗き見ようとする試みであった。

4つ目の研究発表、ポール・ハラール氏の「‘Usually The Better Ones’: Into Crystalline with Murdoch and Kuan Yin」では、まず氏はマードックの矛盾する主張を指摘した。マードックはそのエッセイ ‘Against Dryness’ でモダニスト作家の作品を「無味乾燥な表現」に終始すると非難するが、一方で、この特質は彼女の作品を動的にすることに成功している。そして、矛盾する

ように見えるが、マードックの *crystalline* という言葉を手掛かりにすると、そこには作家独自の機転の利いた作風が読み取れる。氏は、それをマードックの詩、‘*The Phoenix Hearted*’ (1938) と、*A Severed Head* (1961) の中に見出そうとした。

最後のプログラムは講演である。講演者は、オーストラリアのファリンダー大学のジリアン・ドゥリー博士である。講演者の母国であるオーストラリアでの、アイリス・マードックの受容の歴史を、氏の体験も交えて約1時間の講演の中で聞かせていただいた。また、氏がその著作の中で取

り上げているオーストラリア人哲学者とマードックとの交流が紹介された。

いずれの研究も講演も、マードック研究者にとっては示唆に富むものであった。ただ、今回のように英語が飛び交う国際大会のような場にもかかわらず、参加者が少なく寂しい雰囲気の中での大会であったのが唯一残念なことである。来年はアイリス・マードックの生誕100周年を迎えるので、次回は、より多くの参加者を迎えての大会となることを祈念したい。